

小説 神楽陽子  
挿絵 高浜太郎



# いもうとエロゲー

義妹と実妹も攻略可能？

立ち読み版

第一話

妹をダブルクリック！

006

第二話

妹すくすくダイアリー

057

第三話

放課後いもうとレッスン

100

第四話

淫妹禁縛

144

第五話

妹は魔法☆少女

196

エピソード

汗だく妹クラブ

251

## 登場人物紹介

Characters



せのうみかる  
**瀬納美佳瑠**

孝也の実妹。快活なスポーツ少女で、バレー部に所属している。実はお兄ちゃんが大好きなツンデレ少女。性には潔癖なのだが……!?



せのうくるみ  
**瀬納胡桃**

孝也の義妹。おっとりとした性格で、水泳部に所属。学内でも有名な豊満なバストを持つ。実はエロゲーが好きで夜な夜なこっそりプレイしている。

せのうたかや  
**瀬納孝也**

ふたりの妹と暮らす本編の主人公。ふとしたきっかけで妹たちとエロゲーをして遊ぶことに。

ここで拒絶してしまったら、また妹ときこちない距離ができてしまうだろう。

「お兄ちゃんはじつとしてね。え、ええっと」

胡桃も緊張しているらしく、一度はお兄ちゃんにもたれるのを遠慮する。しかし孝也が安定させるために肩に触れると、安心したようにもたれ掛かってきた。

「じゃあ始めるよ。ファイルは、つと……」

妹のお尻に向かってオチンチンが勃起しすぎないことを祈りながら、アダルトゲームを再開する。『妹すくすくダイアリー』ではヒロインの恰好も基本的にスクール水着だ。

知識はあつてもまだまだ初心な胡桃が、震えがちな手でマウスを取る。

「ねえ、お兄ちゃんって、このゲームしながら……してるの？」

ストレートな質問のせいで、ムードはどんどん危うくなってきた。

「そ、それは……プライベートに関わることだから」

「えー？ 教えて欲しいよお、お兄ちゃん。ちつ、ぢゃないとイタズラしちゃうもん」

妹のほうにも少なからず動揺が見られ、何でもない言葉を囁む。小さなその手は水着の真下をくぐり、孝也の股間をズボン越しに一撫でした。

「ここっから、胡桃！ そういうことは」

「往生際が悪いよ？ ねっ、くるみも教えてあげるからあ」

手つきはおぼつかなく、ズボンと下着に阻まれて指の動きまではわからない。それでも妹に股間をさすってもらえるというシチュエーションだけで興奮できる。

しかも妹の恰好はスクール水着で、隙だらけ。

お兄ちゃんは胸をどきどきさせながら、オナニーについて白状した。

「前はあんまりしなかったんだけど、エロゲーするようになってから……かな」

妹のおさげが鼻に掛かってこそばゆい。女性用のシャンプーならではの甘い香りが鼻先に漂い、兄の興味をかきたてる。

「エロゲーしながら？ お兄ちゃんったら、もおエッチすぎ」

顔つきや喋り方は幼い頃からほとんど変わっていないが、シャンプーひとつにせよ女の子としての自覚が歳相応にあるのだろう。

（すごく女らしくなっちゃってるじゃないか、胡桃）

胡桃は「オナニー」の選択肢をクリックし、卑猥なCGに見入っていた。モザイクにはヒロインの指が入り込み、そこから意味深な蜜を滴らせている。

「その……胡桃はどうなんだ？ こういうふうにとりエッチしてるって？」

「ええっ、ええと……へんなこと考えちゃだめだよ、お兄ちゃん」

そう言いつつ、妹の左手はスクール水着のフロントデルタに伸びていた。ゲームのヒロインと同じように欲求不満になって、自ら慰めることがあるのかも。

悩殺的な水着姿のせいで、こちらのブレーキも利きにくくなってくる。孝也と胡桃は赤面し、含みのあるアイコンタクトを交わしながら、ゲームの調教を進めた。

（これとか選んだら、どんな反応するかな）

今までは避けていた選択肢「セックス」に孝也がカーソルを当てると、胡桃が三秒ほど間を置いて静かに頷く。

フルボイスは一段と甲高くなって部屋に響き渡った。

『んああああっ！ お兄ちゃん、あん、いっぱい突いてえ！ お兄ちゃん好みの、えへああ、マゾになりたいの！ はあっ、これしゅき、ちんぽ大好きい！』

結合音もぬちゃぬちゃと再生され、おかしな気分になってくる。

孝也は妹の肩にそつと掴まり、問いかけた。

「な、なあ。どうしてこんな……近親相姦のゲームなんて買ったんだ？」

兄妹姦の願望があるのでは、と疑いたくなくなってしまふ。それでもなければ、お兄ちゃんに膝に座ってアダルトゲームをプレイするはずがない。

(もとは兄妹じゃないんだし。そりゃ僕にとつては妹みたいなものだったけど)

何より「血が繋がっていない」という事実が言い訳を可能にした。

「それは……だつて、お兄ちゃんが」

胡桃ははつきりとしなが、言葉のフェードアウトがかえつて本音を吐露している。口ごもりたくなるようなことがしたのであるか。

「水着まで着ちゃつて、どうしちゃったんだ？ 胡桃は」

「ううっ、なんかお兄ちゃん、イジワルだよお……」

真っ赤になる初々しい反応が可愛くて、つい意地が悪いことを囁いてしまふ。

妹の一途なまなざしは、兄としての保護欲だけでなく男心まで駆り立てた。守ってやりたくなると同時に、自分の手で独占してしまいたくなる。

(これは別に……撫でてるだけで)

肩から上腕に掛けての肌はほんのりと温かく、磨かれたようにすべすべだ。

最初は肩を強張らせていた妹が、くぐもった吐息を漏らす。

「お兄ちゃん、昨日よりなんか優しい……んはあつ、もつとそお、可愛がつてえ」

愛妹の色っぽい声は、ゲームのヒロインが連発する嬌声よりも耳に残り、さらなる意欲を触発した。まごつく彼女の細腰を、孝也はどうとう抱きかかえてしまう。

「こんなふうにしたら、ゲームだとき、愛情値あいじょうちが上がったりするよな。こないだわかったんだけど、『ぶっかけ』はすごく上昇するんだぞ」

「ほんとに？ じゃあ次は……あつ？ ちよつと、お兄ちゃん？」

いきなり触れすぎてしまったのか。

しかし胡桃が意識しているのはまた別のモノらしく、お尻を少しだけ浮かせて、そこへの刺激を和らげた。

(やばい、前よりピンピンになってるかも)

孝也のペニスが膨張し、妹のスクール水着をなぞっていたのだ。息が乱れるほど昂つていては鎮まる見込みもなく、ズボンの中央でテントを張っている。

「お兄ちゃんの、膨らんじゃってるう……だいじょうぶ？ これって、おつきくなったら

出さないといけないんじゃないの？」

勉強不足の妹はどうやら、兄にとつて都合のよい誤解をしているらしかった。おかげで射精の大義名分を獲得し、期待もしてしまふ。

「別にあとでも……いや、出したほうがいいのかな、なんて……」

背中を寒気みたいな背徳感に襲われた。純真な妹を言葉巧みに騙し、射精の手伝いをさせよう、という己の浅ましさが罪深い。

「あ、待つて！ お兄ちゃん」

「しし、しないつてば！」

止められて残念に思う一方、安心もした。妹にペニスを見せるには覚悟が必要で、それが性目的となつては尚更だ。童貞の孝也にとつてはひとつひとつがハードルである。

胡桃はゲーム中の、水着に浴びせられたがっているヒロインへと目配せした。

「そうじゃなくつて、出すんならね、ゲームとおんなじ……くるみの水着にかけてみて欲しいなつて。そういうの、お兄ちゃんはやつぱりイヤ？」

「ぶ、ぶっかけ!？」

調教メニューのひとつ「ぶっかけ」に興味があるようだ。こういったプレイで嫌がるのは女性のほうだろうが、妹の感覚は少しずれている。

「でも胡桃はこんな、えと、エッチなポーズとかできないだろ？」

「が、頑張るからつ。セックスじゃなかつたら……えへへ、できるもん」



困ったように眉を傾けながらも、意気込んで見せる照れ笑いがいじらしい。

がちがちに緊張するお兄ちゃんの前で妹は立ち上がり、兄禁制のプロポーションを伸びきらせた。スクール水着がウエストにくいっと角度をつけ、巨乳とお尻で波を打つ。

(胡桃の水着にかけちゃうなんて……ほんとにいいのかな)

セックスはしない、という共通認識はむしろほかのプレイを許容する言い訳になりつつあった。セックス以外のプレイはエロゲーが山ほど教えてくれる。

「じゃあ……い、一回だけ出しちゃうぞ？」

ばっくんばっくんと胸を高鳴らせながら、孝也は水着姿の妹をベッドへと導いた。触ったりせずともよいメニューなら、エロゲーのほうでもオートで進行しているところ。

「お兄ちゃん、さつきより目がエッチになってるかも」

「え？ ごめん、そんなつもりはないんだけど」

ベッドの上で胡桃は三角座りになり、美味しそうな太腿を照り返らせている。スクール水着はうら若い肉体の健康美を際立たせ、また妹の内面的な幼さも強調した。露出の多いビキニやハイレグを着こなす胡桃はちよつと想像できない。

「どれくらい出るのかな？ お兄ちゃん、ち、ちゃんと水着にかけてね？」

なのに誘惑上手に囁き、愛らしい照れ笑いを咲かせるのだ。「ぶっかけ」を受けるために足を崩し、紺色のスクール水着を見せびらかす。

(僕だけオナニーするより……)

妹のあられもない姿をもっと見たくなってきた。孝也はまだズボンを降ろさず、蠱惑的なスタイルの妹にゲーム的な命令を与える。

「胡桃も、その……オナニーしてごらん？ ゲームの子がやってるふうになさ」

妹はかあつと小顔を赤らめ、猫みたいな手つきで巨乳をかき抱いた。

「えええええっ!! くるみが、あのっ、お兄ちゃんの前でひとりエッチするの？」

孝也としては無難な選択のつもりだったが、それでも「エロゲー」の調教メニューを基準とした判断だ。妹の肌に触れず、ましてやペニスを擦り付ける必要のないプレイといったら、オナニーくらいしか残らない。

「嫌ならいいんだぞ。さ、触ったりするほうがいいか？」

「ちよつと待って？ ……心の準備だけ」

胡桃は太腿をびったりと閉じ合わせ、兄の視線を遮ろうとした。だが、恥じらう仕草がかえって扇情的で、スクール水着では隙だらけもいいところ。巨乳を隠したがって抱きかかえても、谷間を寄せあげる挑発にしかならない。

（こんなカラダでオナニーしてるんだよな？ エロゲーしながら）

妹の発育ぶりに無関心ではいられなく、お兄ちゃんは目を見張った。催促みたいな視線になってしまいが、無節操な興味を断ち切ることも難しい。

しばらくの沈黙のあと、胡桃はおずおずと脚を開いた。スクール水着の薄生地が股間の下をくぐっているのを披露する。

「くるみもしたほうが、お兄ちゃんがコーフンするんなら……ちよつとだけだよ？」

腕が解かれると、巨乳の重さが水着のストラップを牽引した。

妹の深呼吸がカウントダウンとなり、ふたりの緊張感を極限まで高める。

やがて胡桃の中指と薬指が股布の脇へと潜り込んだ。お兄ちゃんに女性器を見られないように注意しながら、少しずつ指先を沈めていく。

「んくふう？ はあ……だめ、いつもと全然……あむうう！」

下唇を噛んで耐える表情がさらに赤くなる。

耳を澄ませば、ぬちゃぬちゃと粘っこい音が聞こえてきた。妹のオナニー姿に孝也は息を呑むほど興奮し、知らず知らず前のめりになってしまう。

「いつもより気持ちいいのか？ 胡桃」

「違うの、指がうまく動かさなくて……んはっあ、お兄ちゃんが見てるからあ」

スクール水着が邪魔で、指を動かすのが難しいらしい。孝也の視線も間違いなく胡桃を追い詰めており、オナニーはなかなか要領を得なかった。

（僕が見てちゃできないのかも。でも、見てコーフンしなくちゃだし？）

しかし見てやらないわけにもいかず、妹のオナニー観察を続ける。

胡桃はもじもじと身じろぎ、股布を引っ掛けたり戻したりした。さすがに一枚しかない薄生地は剥がすに剥がせず、もどかしい時間が続く。

「モザイクとかあったらいいのに。くるみ、まだ生えてないから恥ずかしい……」

生えていない、と聞いてしまつてはますます目が離せなくなつた。お兄ちゃんの視線を躍起にさせている自覚はないのだろうか。

「笑つたりしないから。胡桃、ちよつとだけ見せて」

「うう、お兄ちゃんが真剣になつてるよお」

妹は墓穴を掘り続け、観念したように目を瞑つた。次に細目を開けると同時に、とうとうスクール水着の股布を脇に寄せてしまふ。

言葉通り生えてもいない幼いクレパスが露になつた。

「……そんなにジロジロ見ないで？」

孝也がベッドに乗りあがつて覗き込むと、胡桃の瞳に涙が浮かぶ。

しかし遠慮などしてられない。モザイクでしか知らなかつた女の子の入り口は、縦筋となつてめり込み、一見すると関節皴しむのようだつた。

そこに胡桃の指が差し掛かると、内側に糸を引きつつ拡がつて正体を現す。

「ここだよ？ お兄ちゃん……も、もう隠していい？」

ひし形に開いた秘裂はピンク色のぬめりで満たされていた。肉唇の花びらが綻び、視線を奥へと誘い込む。嗅覚にツンとくる甘酸っぱい刺激臭は、胡桃のにおい。

(これが女の子の……胡桃のオマ○コかあ)

さらに内側の肉唇をくぐつたところには、秘密の腔口が隠されていた。ペニスが入るには見るからに小さすぎて、「締め付け」とやらの想像をかきたてられる。

「どんなふうにしてるんだ？ いつも」

「こ、こんなふうに……んあぁ、くるみ、ユビで端っこから」

胡桃は中指を鉤状に曲げ、肉唇の合わせ目を捲りあげた。

埋もれていた突起が飛び出し、ひくひくと疼く。これが女の子の急所であるクリトリスで間違いないのだろう。

オナニー少女の指先が肉豆を器用に摘んで、包皮を剥く。すると清純なベビーフェイスも牝の本性を曝け出し、うっとり艶を深めた。

「えあはっ、お兄ちゃんが見てるのに、ふう、ユビがとまんない……ひはあ！」  
充血したクリトリスを小刻みに擦りながら、もどかしそうに空腰を打つ。

（ほんとに始まつちやつたよ！）

兄の部屋で、しかもスクール水着の恰好で自慰に耽る妹相手に、孝也は性的興奮を禁じえなかった。心臓へとせりあがるような高揚感が込み上げ、胸が熱い。

エロゲーよろしく、お兄ちゃんはさらにサブコマンドを追加した。携帯電話のカメラをオンにし、妹の女性器へと近づけてしまう。

「おっお兄ちゃん？ 待って、んあ、撮っちゃやだ！」

「ゲームでも撮影してんじゃないか。それに胡桃だって僕のを撮っただろ？」  
撮られた分は撮って仕返ししてやらなければならぬ。

胡桃は耳まで真っ赤になり、オナニーの途中だった中指を引き抜こうとした。けれども

肉体の快楽を中断させたくないのか、恥ずかしそうに目を瞑ってでも自慰を続ける。左手で股布を押さえながら右手で慰めるテクニクからして、慣れているのかも。

「あとでお兄ちゃんも、んふあつ、おなにーするんだからね？」

熱っぽさと切なさが入り混じった吐息を散らし、舌足らずな声を上擦らせる。カメラの前であるにもかかわらず、妹は淫らな指遊びを繰り返して、穴を潤わせた。

困惑と羞恥をない交ぜにした初々しい表情は、無性に撫でてやりたくなるほど可愛い。両肩にスクール水着のストラップを引っ掛けた白い肉体が、敏感そうに打ち震える。

「すごいぞ？　胡桃、そんなふうにおナニーしてたのか」

よく盛り上がった胸元の薄生地には、乳頭のものらしい角が尖っていた。呼吸のたびにたふんと揺れ、むしろ身体のほうを弾ませる。

「だめえ、お兄ちゃん……んくふう、くるみ、へんな声出ちゃうの」

お兄ちゃんの目の前では決してあつてはならない、はしたない顔つきだった。眉間には力が入りきつておらず、再び開かれた瞳が涙を溜める。頬は吐息の熱で上気し、上擦った切ない声色はとても誘惑上手。

白い肌には汗の気が多くなり、スクール水着から甘いにおいを溢れさせる。

（こんな見せられたらガマンなんて！　かけるだけなら）

孝也も己を慰めずにいられなくなり、パンツごとズボンをずらした。妹の前では許されない形となったオチンチンが元気に先端を振り上げる。



「いやちよつと、教えるも何も……み、美佳瑠？」

孝也は椅子ごと部屋の壁ぎわまでさがって、うろたえるばかり。

すぐ目の前に妹が近づき、シャンプーのものらしいミントの香りを漂わせる。

「な、なによ？ 胡桃とは一緒にできて、わたしとはできないってこと？ 最後までするんじやなかったら、べ、別に実の妹だって問題ないじゃない」

胡桃のものに引けを取らない巨乳が、谷間を見せ付けるように前のめりになった。

「実のとか、そういう話じゃなくて……」

白色の体操服にうっすらとブラジャーの輪郭が透け、ボディラインへの興味をかきたてる。妹であることを自慢に思いつつ、諦めなければならぬ身体つきだ。

（こんなにエロく……じゃない、ムチムチに……って、そうじゃないだろ、僕！）

それがたまらなく美味しそうな果実に思えてしまつて、理性ぶつた思考に本能的な興味が混ざり始めた。

生意気な妹の小顔は紅潮し、強がついていても眉の引きが決まらない。

「ほんとに胡桃と最後までしてないんなら、できるでしょ？」

湿ったストリートヘアは美佳瑠の細腰にまとわりつき、お尻を撫で下ろしていた。紺色のブルマからは肉感的な太腿がむっちりと食み出し、柔肌を照り返らせている。

妹のカラダへの興味を断ち切れない孝也はごくりと咽を鳴らした。

「そんなこと言われても、その、胡桃は僕の膝に座ったりするんだぞ？」



「座るっ？ ……わ、わかってるわよ、それくらい」

見るからに戸惑いつつ、美佳瑠がおずおずとお尻を向ける。

食い込みの入ったブルマは孝也の膝へと降り、柔らかな弾力を転がした。丸く張った薄生地で、ズボン越しにお兄ちゃんの股間を圧迫している自覚はないのかも。

（すごいことになっちゃったぞ？ 美佳瑠とエロゲーだなんて）

いけないことだと頭ではわかっている。けれども、妹とアダルトゲームに興じる楽しさと疚しさは、兄に妥協できるだけの理由を求めさせた。

（これは僕じゃなくって、美佳瑠がガマンできなくなってるわけで……待てよ？ もしかして美佳瑠、ガマンできなくなっちゃってるのか？）

問題の『放課後いもうとレッスン』は、メインヒロインがバレー部員であり、美佳瑠のあらぬ妄想に拍車を掛けたのかもしれない。何しろゲームの中ではお兄ちゃんにブルマを触られたり、舐められたり、お漏らしを命令されたりしているのだ。

「あに、ちゃんとガマンしてよ？ ほんとにゲームするだけなんだからね？」

プレイ中だった洋ゲーのゲームディスクを美佳瑠が取り出してしまふ。

「セーブがまだ……まあ一回くらい、いいんだけどさ」

「一回で充分よ！ まさかあに、胡桃とはもう何回も？」

戦闘一回分の経験値が無駄になったくらい構わない、と言ったつもりが、妹には大変な誤解をされた。合意したわけでもなくとも、実妹を膝に乗せて『放課後いもうとレッスン』

のタイトルと向かい合うはめに。

(とにかくきりのいいところで終わらせるしか……そうだ、余計なことは考えるな)

何も彼女にワイセツを働くわけではない。単に一緒にゲームをプレイするだけで、そのゲームが少々刺激的であるということ。

孝也のデータは昨夜も進めたもので、すでに半分ほどの特訓メニューが揃っていた。表向きは「肺活量のトレーニング」や「体力作り」だが、内訳はどれもエッチ三昧。

「あ、あにいが選んでよ。あにいがどういうの好みか見てあげる」

「僕が？　じ、じゃあ……ええと、これとかかな？」

無難なメニューを選びたくても、逃げ道となる選択肢はない。せめてモザイクのペニスが出てこない「大腿筋のトレーニング」を選ぶ。

ゲームのヒロインは美佳瑠と同じ恰好で、太腿の間にお兄ちゃんの顔を挟んだ。クンニでイクまで起立の姿勢を維持させるといふ、過酷なトレーニングだ。

フルボイスの喘ぎ声がプレイヤーの気分を盛り上げる。

『お兄たん、そんなにしちゃだめえ……誰かに見つかったちゃうよお』  
「やだ、あにい……いつもこんなこと考えてるの？」

膝の上の妹は紅潮しつつ、画面で練り広げられる淫行に見入っていた。ヒロインのブルマは股布が濡れ、脇から意味深な蜜が垂れている。

「い、いつも考えてるわけじゃないぞ？　時々……いや、たまにくらいで」

実妹のブルマも濡れ始めてはいないかと、薄生地感触を無意識に追ってしまふ。美佳瑠本人はゲームの恰好を真似ただけかもしれないが、風呂上がりならではの温もりと香りのよさが、実の兄さえ急ぎたてた。

（少しだけ……美佳瑠が落ちないように支えるだけだし？）

体操服のウエストなら、と孝也は少しずつハードルを下げていく。

お兄ちゃんの腕に抱かれる姿勢になった妹も抵抗はしない。

「ひとりでプレイするよりドキドキしちゃう……次はわたしが選んでいい？」

「え？ い、いいけど、あんまり刺激が強すぎるのは」

美佳瑠の手はぎこちない動きでマウスを取り、クンニ中の追加メニューを開いた。

チヨロチヨロチヨロチヨロ……！

堪えきれなくなったヒロインが、お兄ちゃんの顔の上でお漏らしを始めてしまふ。紺色のブルマから溢れるオシッコの量はおびただ夥しい。

すると膝の上の実妹もブルマの股座を押さえ、もじもじとした。

「……もしかして美佳瑠、オシッコしたくなつたのか？」

「ち、ちが！ ……ちよつと想像しちゃうただけで」

すでに孝也の脳裏には、美佳瑠がオシッコするイメージが鮮烈に浮かんでいる。女の子の排泄にいかがわしい興味を抱き、そのイメージをかき消すことができなかつた。

「胡桃みたいに言つたよな？ 美佳瑠、ほんとにやってみるか？」

「ばばっばか！ そんなことするわけ」

オシッコなど命令しようものなら蹴りの一発でも放ってきそうなのに、今日の美佳瑠はおとなしい。自分から言い出しにくいこととなったら、相手のペースに乗って受動的にコトを進めようとするのは、兄の孝也と同じだ。

「胡桃はゲームと同じこととしてくれたぞ？ 勝ち負けってことでもないけどさ」  
ライバルの名前を出すと、美佳瑠が悔しそうに歯噛みする。

「ひ、卑怯よ？ あにい、『胡桃は』って言えば、わたしが何でもすると思ってるの？」  
甘え上手で積極的な胡桃と違って、この妹は往生際が悪く抵抗が長い。つまり口下手に否定する時点で、本心はまんざらでもないわけ。

（挿れたりするわけじゃないんだし、うん。美佳瑠が嫌がったりしないんなら……）  
背徳感では抑えきれない男としての衝動が、異性としての妹に執着し始める。

お兄ちゃんのエロゲーのワンシーンを再現するべく、実妹を廊下へと連れ出した。  
「ほら、汗かくって言ってただろ」

美佳瑠は身じろぐだけで、紺色のブルマも隙だらけ。

「あにい？ わたし、まだするって決めたわけじゃないのよ？」

いつもの刺々しさはなりを潜め、さっきの選択肢と同じ命令を待っている。

生意気な妹がエッチになるところも従順になるとは知らなかった。責める側の孝也は調子に乗り、気になっていたブルマへと手を伸ばす。

「ちよつとだけ、な？」

実の兄妹では許されないムードが高まっていた。むしろ兄妹だからこそ、溺れるくらいムードに吞まれているかも。妹の誘うような腰つきが悩ましい。

胡桃の部屋の前で、美佳瑠は緊張気味にドアにもたれた。

「ほんとにちよつと、んはあ、少しだけだからね？ 初めて……なんだから」

息遣いには少なからず乱れがあり、もどかしそうにも聞こえる。どうやら火照った肉体は欲求不満に陥りつつあるらしい。

まずは体操服を捲り、ブラジャーのデザインから調べてやることにした。

「きゃ！ あにい、見ちゃだめ」

「いやでも、ゲームの女の子は見せてるし」

実りの豊かさはそれこそたわわな果実のようだ。収穫でもされるみたいにブラジャーに包まれ、華奢な身体の上でふくよかな存在感を放つ。

下着は水色のストライプで、膨らみに視覚的な曲線をつけていた。よくここまで見事に育ったものだど、兄ながらに感心する。

「胡桃とどつちが大きいんだ？」

「そ、それは……あの」

美佳瑠は「あ」とか「う」など意味のない呟きで時間を稼ぎ、丸っこい小顔を赤らめた。普段のようにハキハキとはものを言えず、口ごもってはぐらかす。

「どっちでもいいでしょ？ 大きさより、か、カタチが大事なのっ」

その言葉通り、美佳瑠の巨乳は大きいばかりでなく流麗なラインを描いていた。

（よし、ちよつとだけ……）

ブラジャー越しに触れても温かい。下から麓を持ち上げると、成熟メロン並みの重たさが手首にずしりとくる。

重さと同時に柔らかく、力を入れずとも指がむにゅうと食い込んだ。

「んあつ？ こ、こら！ あにい？ 触るのはだめったら」

駄目と言いつつ、妹の表情は色っぽくて切ない。悪戯じみた手つきで揉みしだいてやると、純真な瞳に涙を溜め、ありありと羞恥を浮かべる。

美佳瑠はドアを背中を擦りつけ、罪作りの肉体を扇情的にくねらせた。恥じらう仕草で実兄の劣情を駆り立てていることに自覚はないらしい。体操着の中から色気をムンムンにおわせ、孝也の意識を引きずり込む。

「敏感なんだな、美佳瑠のおっぱい。……怖いかな？」

実妹の挑発的にならざるを得ないブルマ姿を眺めながら、お兄ちゃん体操服の括れを少しずつ撫で下ろした。そのままブルマに触れると思わせ、血色のよい太腿にタッチ。

「これくらい、怖いわけ……あつ？ あにい、そこ、くすぐったいってばあ」

無防備な太腿をさすり、しっとり汗ばんでいるのを確認する。茹で卵みたいに張りがある、むっちりとした触り心地もたまらない。

さらに両手でブルマを抱え込むと、正面から美佳瑠を抱き締める行為にもなった。妹の巨乳がお兄ちゃんの胸元を這い上がってくる。

「胡桃と、んふあ、こんなことまでしてたの？ あにいのばか」

「こんなに強く抱き締めたのは初めてで……ええと、なんていうか」

妹相手にしかも浮気だ。背徳感が心臓を打ち鳴らし、今すぐ離れるように警告する。

けれどもブルマの少し湿った感触が新鮮で、手を離すに離せない。股布は両脇とも太腿の付け根にみっちり食い込んでおり、ショーツを念入りに閉じ込めていた。

ブルマの両サイドに指を引っ掛け、引っ張りあげてやると、股座とお尻の食い込みが同時にきつくなる。

「こらあ！ あんまり調子に、ひはっあ、乗らないで」

マゾっ気の多い悶えぶりを見せられては、ブレーキも利きにくくなるものだ。足が廊下に届きづらくなるまで持ち上げれば、美佳瑠のほうからお兄ちゃんにしがみつく。

「美佳瑠がエッチな声出すから、僕までヘンになつてきたじゃないか」

紺のブルマにくつきりと浮かぶ可愛いお尻も感度がよかった。曲線の外側を撫でても谷間の食い込みをくすぐつても、妹の腰がびくと驚く。

「脱がさないですよ？ えはあ、脱がしたりしたら、蹴るから」

脱がすまでもない。美佳瑠のプロポーションはほとんど裸同然となり、孝也の手つきはそれに沿って波を描いた。体操着の中をまさぐつたら、いよいよブルマに侵入する。

「脱がさないから、じっとしてるんだぞ」

唇を嚙んででも耐えようとする、妹の健気な頑張りが心にくい。

おへその下からブルマの股上へと差し込んだ右手がぬつちよりと濡れた。ショーツは股底に生温かい液を溜めており、お漏らしでもしたかのように思えてしまう。

ブルマのおかげででのひらに圧力が掛かり、脚の付け根に指がぐにりと挟まった。性毛の類はどこにもなく、パンツの中央で簡単に秘裂を探し当てることができるとは。

「そんなとこ触っちゃ……ムードなんか出したって、っんふああ、絶対させてあげないんだから……ひあっんああ！」

反抗的なのは口だけで、熱を帯びつつある肉体は素直に股間をまさぐられていた。美佳溜はさらに孝也の首筋にしがみつき、シャツを嚙む。

今にもよじ登ってこれれそうな密着感だ。

(どうにかなっっちゃいそうだよ、妹だっと思うと余計に)

実兄にとつて禁断の温もりを今すぐ独占したくなった。しかし兄妹である以上、直に女性器に触れるのは遠慮して、ショーツ越しにクレバスをなぞる。

「エロゲーするってことは、美佳溜もオナニーは知ってるよな？」

「しっ、知らない！ そんなの、あふあ、知るわけ……」

声を上擦らせて顔まで背けるのは、知っている反応だ。この妹がこっそり自慰に耽っているのを想像するだけで、抱いてはならない劣情に拍車が掛かる。



先日胡桃の秘部を弄りまわした経験もあって、急所の位置は読めた。ショーツ越しに濡れそぼったワレメに中指を当て、浅めに潜り込む。すると美佳瑠はブルマの両サイドを引っ掴み、汗ばむ太腿を擦り合わせた。

「ああ、あにいい!? はいってる! ユビが、んあつ、えはああああ?」  
灼けた吐息を散らし、悩ましそうに片目を伏せる。

クレパスの上端には敏感な粒身が隠れており、ショーツの生地を当てて弾くと、ブルマの腰がびくと跳ねた。ドアにお尻を擦り付けながら、背中をのけぞらせていく。

「ほら、さっきのエロゲーみたいにおシッコしないと……」

「待って? そんなの無理、んあつうむう! えふあ、あにいのイジワルう」

紺色のブルマは土手の下がぐつしよりと濡れ、太腿にいくつも雫を伝わらせた。男性のガマン汁とは根本的に異なるらしく、尿漏れだったとしても不思議ではない。

(すごい濡れ方……女の子のカラダってエッチすぎるよ)

愛液は秘裂の上のほうから湧いており、肉豆の陰に膣口とは異なる小さな窪みがあった。さしたる抵抗もなく中指が第一関節まで入り、美佳瑠の体温を液ごと絡みつかせる。

もじもじとお尻を上げ下げするのは、彼女なりに排泄を意識しているからだろう。それも家の廊下で、お兄ちゃんの前では恥ずかしいに違いなかった。

「あにいい、ほかのプレイにして? ちゃんと、んはあ、あにいの言う通りにするから」  
「だったらもつとすごいプレイになるかもだぞ? 美佳瑠はそれでもいいのか?」

妹のブルマに手を突っ込んで放尿を命令するなど、悪戯がすぎていると頭ではわかって  
いるつもり。しかし妹の感じやすい肉体を抱きかかえては、もうやめられない。

捲られた体操服からは瑞々しい肌が露出し、艶やかな光沢を放っていた。胸の谷間へと  
向かって伸びるおへそのラインが獣欲をそそる。

「けどオシッコなんて……ひあつ、い、いじっちゃやだ！」

クリトリスを弾かれるたび、美佳瑠は熱っぽい喘ぎを速めた。ブルマのサイドを掴む握  
力だけは強いのに、爪先立つ姿勢は震えがちで弱々しい。

ぬちゅつ、ぬちゃ！ ぬちゅぬちゅ！

秘密の入り口から淫液が溢れ、ブルマを潤わせる。

妹の肉体は発情期のおいをふんだんに振りまき、お兄ちゃんをくらくらさせた。

(美佳瑠ってこんなに可愛かったっけ?)

無意識に孝也は妹に詰め寄り、高揚感に吞まれていく。中指の動きを細かくして、下着  
越しに秘裂を執拗になぞる。ほかの指がブルマの股脇から食み出す勢いだ。

「だめえ！ あんつ、あにい！ ほんとに出ちゃう、出ちゃうの！」

美佳瑠は目を瞑って歯を食い縛り、お兄ちゃんのほぐし指に耐えた。息継ぎの拍子に下  
半身から力が抜けかかつては、すんでのところでもまた息む。

その回数をこなすごとに膝が笑い、もう踏ん張っていられない様子だ。いつものように  
吊り上げられない瞳に涙を溜め、親に悪戯を詫びる子どもみたいな泣き顔になる。



使用する穴は大間違いだが、セックス自体が初めてで、要領も加減もわからない。それでも処女を奪ってやりたい欲求と、実妹への支配欲が背中を押す。

カメラは美佳瑠たちの正面にあり、兄妹姦の撮影を続けているだろう。  
ずぶっ……ずぶずぶ！

肛門の向こうには、剛直の硬さでさえひん曲がりそうな圧力が待ち構えていた。挿入を拒む妹が括約筋に力を集中させているせいかもしれない。

「ひぎいいいいい！ えふっ、あにいのばか、あとでぶっとばすんだからあ！」  
強情なお尻をばしんと叩くと、進む方向でいくらか圧力が和らぐ。

「きっ、きつい！ はあ、これすごいよ……美佳瑠のオシリ！」  
たまらず孝也は妹のブルマに掴まり、生理的な胴震えを起こした。己の太さがぎちぎちと軋みながら、実妹の肛門をこじ開けていく。

入り口からいきなり狭すぎて、張り出たエラは入るかどうか。  
「こんなのやだあつ！ やめて、あぐっ、あにい、ひろがつひやうう！」

兄妹姦から逃れたがって美佳瑠は前のめりになり、胡桃と巨乳を牽引しあつた。  
「もしかしてお兄ちゃん、美佳瑠ちゃんと、ひあ、おしりで……？」

仲間外れにされた胡桃がのけぞり、ローターの振動を美佳瑠のものと重ねあわせる。  
ずぶずぶずぶずぶずぶっ！  
すると美佳瑠の尻穴が抵抗を弱くし、兄の剛直を招き入れた。

「だだっだめ、はいる！ はいってきちゃ、あはええええええええええええええええッ!?」  
美佳瑠がしゃくりあげ、自らの喘ぎで息を切らせる。その悩ましさにあてられて劣情が燃え上がり、お尻の谷間に割り込まずにいられない。

「美佳瑠！ いいぞ、はいってく！ 美佳瑠のなかに、うあああああああ？」

最大の太さであるエラさえ肛門をぐぐり抜ければ、あとはスムーズに入るものと思っていた。ところが、そこから先は押し込むまでもなく吸い込まれたのだ。

凄まじいバキュームが兄妹の肉体を繋ぎあわせてしまう。孝也と美佳瑠は一緒になって息を荒らげ、腰の震えまでシンクロさせた。

「さっきずっと、はあ、いきなりはいつてったぞ？」

「知らない、あにいが勝手にいれたくせに……あふっううん！」

アナルを恋人扱いされる妹が、舌も引つ込められない顔つきで苦悶する。

尻穴は内側にめり込み、さっきのフェラチオさえ上まわる吸い付きを發揮していた。紺色のブルマから食み出す太腿はべっとり蒸れ、赤みが差すくらいに火照っている。

「ずるいよ、美佳瑠ちゃんばかり！ お兄ちゃん、はあ、くるみは？」

その下では胡桃が切なそうにスクール水着のラインを振っていた。お兄ちゃんの浮気が変態的なアナルセックスと知っても、羨ましそうなまなざしがいじらしい。

美佳瑠は肩越しに振り向き、涙目ながらに中断を訴えてくる。

「胡桃にしてあげればいいじゃない、んへあっ、あふ、わたしはいいからあ！ あにいの」

「ばか、えぐう、ばかばかあ！」

耳まで真っ赤にして罵声を吐くが、声にはまるで張りがなかった。泣きそうなのを我慢するいとけない表情が、お兄ちゃんの獣性を昂らせる。

アナルのバキュームは凄まじく、ブルマが孝也の下半身にぴったりと接触した。

（これがアナルセックス！ すごいや、ギチギチに締まってる！）

肉棒が脈打つだけでも圧力が大きくうねるのがたまらない。根っこをきつく締め付けられていなければ、とつくに暴発していただろう。

どうやら直腸がモノを堪えるのと同様の力が働いているようだ。最初こそ挿入を頑なに拒んでいたくせに、今は素直な吸い付きをサオの全体に届かせている。

「やだ、あにいの……わたしのなかで、あん、脈うってるう！」

繋がっていては、こちらの興奮は妹にばれれば。拒絶一辺倒だった美佳瑠は、だんだん肩から力を抜き、肉棒の動きを読むようになった。

胡桃が美佳瑠のブルマにスクール水着の土手を擦り付ける。

「ね、ねえ、お兄ちゃん？ おしりのなかつて、んふあ、どんななの？」

「そうだね、ぬめぬめしてて……っはあ、メチャクチャ熱いんだ」

高温多湿のアナルは出口の付近ほど極端に狭苦しかった。それが頑丈なサオを抜くにはもってこいの締め付けとなる。

その一方で奥のほうは刺激が優しく、剥き出しの亀頭でも痛みはなかった。ぬるつきが

卑猥な挿入感を盛り上げ、熱がまわりそうなほど気分を高揚させる。

いやらしい刺激がまとわりついてきて、ピストンには覚悟があるほどだ。

「よし……動かすぞ？ 美佳瑠、イクまで抜いてやらないからな、うあああつ！」

歯を食い縛ったつもりが、声を出して喘がずにいられなかった。剛直を動かすと、二百六十度の腸粘膜が一斉に追いつがってくる。

ぶりゅつ、ぶりゅぶりゅ！

しかも排泄じみた猥音を鳴らしまくり、結合部から黄ばんだ蜜を滲ませるのだ。

「えふああああつ？ 誰も動かしていいなんへ、えあああ！ めくれちゃうう！」

お兄ちゃんにお尻の穴を犯されながら、美佳瑠は喘ぐ唇の上で舌をのたくらせた。羞恥で赤らむ小顔に玉の汗が浮かぶ。

「いつも出してるのと僕のチンポ、はあ、どっちが太いかな？」

初心な肛門はフジツボみたいに捲れ、みちみちと勃起をひり出した。赤い雁首が見えかけたところでベクトルが逆転し、今度は呑み込むように連れ戻す。

「ど、どっちでもいいじゃない……ひあはっ！ だめ、オシリがヘンになってるう！」

反抗もままならない美佳瑠は小鼻をすすり、初々しい涙を溜めた。持ち前の生意気さもへし折れ、ストレートヘアを振り乱して悶え狂う。

そんな妹を守ってやりたいと思いつつ、孝也は少々乱暴なピストンに耽った。

（妹と……セックス！ アナルだけどしちやつてるよ！）

女性器ではないから、という言い訳だけでは罪悪感を振りきれない。恋人として抱くにしても、近親姦の背徳は依然として孝也にまとわりついていた。

不慣れなために闇雲な腰の動きで、妹穴にチンポを抜き挿しする。

「こんなにされたら、わ、わたし！ んへああ！ とめてっ、あにい、やなの、オマ○コでうごいへるのもとめてええええ！」

直腸への苛烈なピストンのみならず、美佳瑠は電動ローターでGスポットを刺激されてもいた。ブルマとスクール水着の土手を擦れ合わせ、胡桃も振動に悶える。

「くるみもだんだん、へあっ、きてるの！ 気持ちいいのきちやってるよお！」

胡桃のGスポットも感度がよくなってきたようで、教室には二匹分の嬌声が響き渡った。姉妹が腰を違う方向に捻っては、乳頭の結び目に引っ張り戻される。

今廊下を誰かが通ったらアウトかも。

「あにい！ そんなに、えひあっ、あん！ がつつくみたいにしないでえ！」

「このオモチャ、らめなの、んええは！ 気持ちいいところに嵌まっちゃってるう！」

緊縛プレイで悦がり狂う妹たちと一緒にお兄ちゃんも悶絶した。

「ほんとやばい、すぐ出そうだよ！ はあっ、んあああ！」

ブルマを掴んで息んだところで、ペニスへと淫熱がせりあがってくるのを食い止められない。実妹のアナルはお兄ちゃんとの勃起を苛烈に吸い上げ、それこそしゃぶるかのよう熱い液を絡みつかせてきた。雁首の括れに快感が染みる。



ピストンの勢いに押され、美佳瑠の巨乳が胡桃の巨乳に乗りあがった。

「んはっあう、もっと優しく、えあん、しなさいよ！　へああっ、ばかあにい！」

「へああ？　美佳瑠ちゃん、あん！　暴れちゃだめえ！」

下の胡桃も悩乱し、競いあつて喘ぎをばらまく。

両手を縛られ、乳頭を括られ、ローターで肉穴を刺激され。そのうえで美佳瑠など、尻穴を乱暴寸前の太さで穿られているのに、心地よさげに上擦った嬌声が悩ましい。

汗みずくのお尻で派手な猥音を奏で、兄妹姦の深さを物語った。

ぶちゅっぐちゅ！　ぬりゅりゅ！　ぐちやつ、みちみち！

「聴かないで！　あにい、あふええ、耳ふさいれへえ！　んひいいッ！」

生意気な美佳瑠の小顔はすっかり上気し、お兄ちゃんとの禁断行為にみつともない涎まです垂れている。その一方で、もうひとりの甘えん坊は次第に快楽に順応し、美佳瑠のブルマにスクール水着を擦り付けた。

「もっとココ、っえはあ、ココだよお、美佳瑠ちゃん！　すぐくいいよお！」

そうすることでお互いローターをより感じやすくなるのだろう。

「こらっ、胡桃？　わたしはそれどころじゃ、んへえあつ！　ちよつとでいいから、あふうう！　あにい、えあつ、やすませてえ！」

「無理だよ！　これとまんない、はあ、気持ちよすぎてとまんないんだ！」

快感の強さに実のところ孝也は尻込みしていた。だが、蠕動する直腸のうねりによって

運ばれ、動かざるをえないのだ。

孝也の腰つきがさまになると、妹の腰つきもリズムカルに。

美佳瑠は乳突起で胡桃の巨乳を牽引しつつ、お兄ちゃんの野蠻で直情的なストロークに悶絶した。ストレートヘアを振り上げるほどのけぞり、吐息で色香をまき散らす。

「オシリなのに！へああん、すごい、ずぼずぼってれたり、は、はいったり！」

孝也からのアングルなら、セックス中のスケベな肛門が丸見えだ。ブルマは捲れ、お尻の半分が悶え汗を照り返らせている。

妹穴の窮屈さはサオを丹念に扱き、射精の意欲をどんどん膨らませた。もはや排泄器官ではなく、仲のよい兄妹がセックスするための穴だろう。

「しっ締まる！美佳瑠のすごい締め付けて、うあっ！はあはあ！」

圧力が苛烈にうねった先では、煮え滾った粘膜が亀頭を包み込んでくれる。先走り汁の滲出する感覚が閃くたび、暴発を予感して脚が攣りそうになった。

「美佳瑠ちゃん、はやくう！くるみも、えはあ、あん！せつくすできるもん！」

「したくてしてるわけ、はあああん！おおっ、オシリなのよ？おひりい！」

部活スタイルの妹たちが乳果で押し合いへしあいする。有酸素運動で汗をかく、これ以上はない体力トレーニングだ。

「気持ちいいか？美佳瑠、つはあ、チンポいいって言ってごらん？」

羞恥でぐちゃぐちゃに涙ぐんでいた美佳瑠の表情も、みるみる陶醉感を帯びてきた。兄

の暗示めいた囁きに従い、カメラに向かって白状するほど。

「い、いい……あにいの、んああは、気持ちいいっ！ いいからもおゆるひて！」

お兄ちゃんよりもリズムに乗って、これみよがしに腰をくねらせる。

妹を屈服させることで興奮は最高潮に達し、怒張が痺れついた。肉体的な快樂ばかりでなく愛情も一緒くたに込み上げ、孝也の胸と股間を加熱させる。

相手が美佳瑠だから止められない。

ぶりゅぶりゅっ！ ぶりゅっ、ぶりゅぶりゅ！

誰にも聞かせられない淫らな結合音は、初めてなりにもリズムを取らせてくれた。孝也は妹のブルマに指を立て、可愛いお尻を捕まえる。

「もう出ちゃうよ、美佳瑠！ ごめん、はあっ、なかに……オシリに出すよ！」

「だめえ！ ちゃんと外につ、んあふあ！ あにい、出しちゃやだあ！」

アナルとはいえ中出しには遠慮があった。けれども痺れの刺激が強すぎて、頭で考えていられるほどの余裕はない。高温の液で裏筋を舐められる感触にもぞくつとする。

妹たちの悶え汗にまみれた部活スタイルも、兄の劣情に拍車を掛けた。

「くるみもお！ これイク、えへああ、オモチャのぶるぶるでイっちゃいそお！」

美佳瑠のブルマをスクール水着のデルタで叩く、胡桃の悦がり姿がいやらしい。両手の拘束と乳芽の緊縛が、もつと苛めてやりたいマゾっ気を醸し出す。

「胡桃のほうがエッチに、くうっ、躍ってるぞ？ はあ、美佳瑠も頑張れ！」

「いやなのにい、えふあつ、こすっちゃ！ ああん、そんなはげしくつかないでえ！」  
素直な胡桃と違って、ブルマ少女は頑なな口ぶりだ。が、無力なだけの抵抗はかえって扇情的で艶めかしい。排泄中と変わらない下品な音もムードを盛り上げた。

ぶちゅつぶちゅちゅ！ ぶりゅうつ！ ぶりゅぶりゅつ！

美佳瑠の尻穴がお兄ちゃんの勃起を咥え込み、黄ばんだ蜜で結合を潤わせる。エッチなクラブ活動中の肉体は火照り、恥汗でどこもかしこもべとべとだ。

妹たちの、呼吸に溺れるような表情も蕩けつつある。

「もっもおだめ！ イっちゃやう、えはつ、おひりでイかされひやう！」

ピストンが激しくなるにつれ、美佳瑠がのけぞって胡桃の巨乳を吊り上げる回数が多くなった。被虐的な声をあげ、発情期のパートナーともつれあう。

「お兄ちゃん、はきゅ、くるみも！ イクの！ いっしょに、へあああああ！」

胡桃も悩乱を極め、かぶりを振る仕草でツイントールを引きずった。ローターの位置を美佳瑠と仲良くぶつけあい、牝の肉体を昂らせていく。

その動きは跳ねるような勢いとなって、ピストンの軌道に波を打たせた。妹たちの喘ぎ声と汗だくの温もり、そしてアナルの卑猥なヌルヌル感に溺れてしまう。

「ほんとごめん、僕！ うあああ、美佳瑠のなかで、ああっああああああっ！」

それでも背徳感を振りきれないまま、孝也は股間でたわめられた熱量を爆発させた。物理的な圧迫感がペニスへとせりあがり、熱もろとも溢れ出す。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なり、美満の方が多いです。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!





# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

## http://ktcom.jp/

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!**19日発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

**ヴァルキリー**

<http://www.comic-Valkyrie.com/>

**cranberry**

<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!